

## ペテロの手紙第二1章12-21節 「世を去る前のことば」

### 1A 思い起こさせる言葉 12-15

### 2A 主イエスの力と来臨 16-21

#### 1B 目撃者 16-18

#### 2B さらに確かな預言のことば 19-21

## 本文

ペテロの手紙第二1章の後半、12節から学んでみたいと思います。私たちは、初めの11節で、主イエス・キリストの恵みと知識によって成長することの教えについて学びました。ペテロの手紙の背景は、偽教師です。こうした者たちに十分に注意することはさることながら、十分に注意するためにも、私たち自身が霊的に前進することこそが、偽教師が教会にはいり込むのを防ぐ、ということがあります。

そこで、ペテロは、1章の始めに、しっかりと、私たちが躓くことのないようにするための指導をしています。一つに、私たちが神の栄光と栄誉によって、召された者たちであるということです。神の召しが、私たちが、永遠のいのちを得るようにするのですが、そのいのちには「敬虔」さがあります。敬虔とは、神のご性質にあずかって、神に似た者として生きるということです。これらが、恵みによって、賜物として与えられ、そのようになると約束されました。それから、「あらゆる熱意を傾けて」という言葉を使って勧めています。キリスト者が日頃から、単に信じているというところから、しっかりと徳や忍耐、知識、自制、敬虔、そして兄弟愛と愛を付け加えていくことを話しています。それによって、多くの実を結ぶことができ、躓くことから守られます。そして御国に入る時に、豊かな恵みを受けることができると約束しています。

### 1A 思い起こさせる言葉 12-15

そして12節に入ります。彼は、これらのことは、読んでいる信者たちがすでに知っていることだと言っています。

<sup>12</sup> ですから、あなたがたがこれらのことをすでに知り、与えられた真理に堅く立っているとはいえ、私はあなたがたに、それをいつも思い起こさせるつもりです。

ペテロはわかっていました、彼らが今まで自分が書いていることは、すでに知っていて、しかも、真理に堅く立っているということ。ペテロは、ここをある意味、感慨深く語っているかもしれません。自分が堅く立っていなかった時、つまずいた時、イエス様に次のように励まされていたからです。「ルカ22:32しかし、わたしはあなたのために、あなたの信仰がなくならないように祈りました。です

から、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」ここの、「力づけてやりなさい」という言葉が、堅く立つと同じなのです。つまり、ペテロはイエス様が言われた通りに行なって、事実、彼らが堅く立っていてくれます。主の結ばせてくださった実を、味わっているのだと思います。

けれども、それを「いつも思い起こさせるつもり」と言っています。すでに分かっている、しっかりと立っているところであっても、私たちが思い起こさせる必要がありますね。

ダビデの生涯のことを思います。彼はサウルから追われる日々をずっと送っていましたが、疲れてしまい、敵のペリシテ人の王アキシュのところに行って、彼のしもべになると偽りました。それで、ツィクラグという町をあてがわれました。そして、周辺の民を襲って虐殺し、けれども、アキシュには、ユダの町々を襲撃したと報告します。そうした偽りの生活が、頂点に達しました。ペリシテ人の陣営として、サウルと戦う時が来たのです。ダビデは率先して戦おうとしましたが、他のペリシテ人の王が彼を疑い、戦いに参加できませんでした。そしてツィクラグの町に戻ってくると、なんと女の子供、家畜すべてがアマレク人に奪い取られていました。みな声を上げて泣き、泣く力もなくなりました。それで、ダビデを石で打ち殺そうという話までがあがりました。

その時に、次のことばがあります、「しかし、ダビデは自分の神、主によって奮い立った。( I サムエル 30:6 )」ダビデは、主を思い出したのです。今のような偽りの生活ではなく、真理に立ち返ったのです。こうして、サウルと戦うというつまづきから守られました。そして、神の恵みは今までのように、彼の動きに再びあふれました。アマレク人から、すべての妻子供を奪還し、家畜を奪還することができました。これが、思い出して、奮い立つことの意味です。いつの間にか、知っていることとはいえ、忘れてしまって、道からそれていってしまいます。だから、思い起こすことが大切です。

<sup>13</sup> それを思い起こさせて、あなたがたを奮い立たせることを、私は地上の幕屋にいるかぎり、なすべきだと思っています。

なぜ、それほど思い起こさせようとしているのかと言いますと、自分自身がまもなく死ぬ身であることを知っているからです。ローマで、皇帝ネロによって死刑にされる直前に、この手紙を書いていると考えられます。そこで、自分のからだを「地上の幕屋」と呼んでいます。

地上の幕屋と言っているのは、イスラエルの荒野の旅において、イスラエルが仮の庵として住んでいたものです。一時的であり、かつ不便なものです。どこかに住んで定着すれば、家を建てることができます。主の住まい自体がそうでした。主の会見の天幕は、雲の柱が動くたびに取り外して移動できるようにしていました。移動可能な住まいです。

そして、主がアダムに与えられた、地上の塵から造られた体は地に変えるものとして、それは一

時的であり、主が天から与えられる、御霊に属する栄光の体をもって甦らせると神はお決めになっていたのです。それで、肉体は衰え、弱く、アダムからの罪を宿しているのに対して、栄光の体は朽ちることがなく、主の命によって力を持ち、そして罪そのものも存在しない体として、それが永遠の家として考えることができるのです。

パウロもまた、同じ表現を使いました。「Ⅱコリ 5:1-4 たとえ私たちの地上の住まいである幕屋が壊れても、私たちには天に、神が下さる建物、人の手によらない永遠の住まいがあることを、私たちは知っています。私たちはこの幕屋にあってうめき、天から与えられる住まいを着たいと切望しています。その幕屋を脱いだとしても、私たちは裸の状態にいることはありません。確かにこの幕屋のうちにいる間、私たちは重荷を負ってうめいています。それは、この幕屋を脱ぎたいからではありません。死ぬはずのものが、いのちによって?み込まれるために、天からの住まいを上に着たいからです。」

そもそも、私たちの本質は霊であり魂であり、体というのは器にしか過ぎません。器によって、私たちの霊が何を感じ、何を思っているのかを知ることができますが、器に私たちの本質はありません。そこでペテロは、今、生きているのはわずかであり、自分自身ができることで最善を尽くしたいと願っています。それが、「私は地上の幕屋にいるかぎり、なすべきだと思っています」ということです。この地上が故郷ではないと知る時、私たちは、なすべきことだけをしたいと願います。

<sup>14</sup> 私たちの主イエス・キリストが示してくださったように、私はこの幕屋を間もなく脱ぎ捨てることを知っています。

脱ぎ捨てることは、イエスが、復活された後にペテロにお語りになっていたことでした。「ヨハネ 21:18b しかし年をとると、あなたは両手を伸ばし、ほかの人があなたに帯をして、望まないところに連れて行きます。」言い伝えによりますと、ペテロはローマで、逆さ磔によって殉教しています。十字架刑にされそうになった時、「私は主と同じように死ぬことはできない。逆さに磔してほしい。」と申し出たということです。

<sup>15</sup> ですから、ぜひとも、私が去った後いつでも、あなたがたがこれらのことを思い起こせるようにしておきたいのです。

ペテロが、自分が死ぬことを、「去る」と言っています。ここのギリシア語は「エクソドン」というもので、英語は「エクソドス(exodus)」つまり、出エジプトに使われています。縛られているところ、奴隷状態であるところから解放されるということです。そしてペテロは、11 節では「永遠の御国に入る恵み」と言っていますが、ここの「入る」は、「エイソドス」であり、エクソドンの反対の言葉です。つまり、ペテロの中には肉体または地上という束縛から解放されて、神の御国に入るという思いがここに

反映されているのでしょう。

そして、去った後も、彼らが思い起こすことができるように、と言っています。自分が去っていくのですから、彼らが思い起こすことばを書き残したいのです。パウロも同じことをしました。エペソの長老たちに来て、自分が死ぬかもしれないことを告げ、ペテロと同じことを言っています。「使徒 20:32 今私は、あなたがたを神とその恵みのみことばにゆだねます。みことばは、あなたがたを成長させ、聖なるものとされたすべての人々とともに、あなたがたに御国を受け継がせることができるのです。」自分が去っていても、語られた神のみことばは残るのです。そして実を結ばせます。そして、御国を受け継がせることができるようになるのです。

## **2A 主イエスの力と来臨 16-21**

そして、ペテロは、「私たちをご自身の栄光と栄誉によって召してくださった神(1:3)」について再び語ります。主イエスが、神の威光と力を携えて、戻ってこられるのです。

### **1B 目撃者 16-18**

<sup>16</sup> 私たちはあなたがたに、私たちの主イエス・キリストの力と来臨を知らせましたが、それは、巧みな作り話によったものではありません。私たちは、キリストの威光の目撃者として伝えたのです。

すでに、教会の中に、主が栄光をもって戻ってこられることについて、「巧みな作り話」として退けている者たちがいました。偽教師たちです。彼らは、主が来られることについて、全然、何も変わっていないではないかと嘲っていると、3章でペテロが書いています。今も、キリスト教会の中で、主の再臨を待ち望むのではなく、空想話であるかのように警戒する人々が多くなっています。後に来る世を信じないで、今の世において楽しむことが大切なのだというような考えが、入っています。けれども、決してそうではないことを知らせるために、主はご自身の御国と栄光の姿を、ペテロ、ヨハネ、ヤコブにお見せになりました。

<sup>17</sup> この方が父なる神から誉れと栄光を受けられたとき、厳かな栄光の中から、このような御声がありました。「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。」<sup>18</sup> 私たちは聖なる山で主とともにいたので、天からかかったこの御声を自分で聞きました。

イエスは、ピリポ・カイサリアで、ご自分が誰であるか弟子たちに尋ねられました。ペテロが、「生ける神の御子キリストです。」と答えました。そして、ご自身が苦しみを受けて、三日目によみがえることを話されました。そして、自分を捨て、自分の十字架を背負い、そしてわたしについて来なさいと語られました。そしてこう言われています。「マルコ 9:1 またイエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに言います。ここに立っている人たちの中には、神の国が力をもって到来しているのを見るまで、決して死を味わわない人たちがいます。」神の国が力を持って現れるということ、そ

れまで生きているのだということです。

そしてそれが六日後に経験したのです。「9:2-8 それから六日目に、イエスはペテロとヤコブとヨハネだけを連れて、高い山に登られた。すると、彼らの目の前でその御姿が変わった。その衣は非常に白く輝き、この世の職人には、とてもなし得ないほどの白さであった。また、エリヤがモーセとともに彼らの前に現れ、イエスと語り合っていた。ペテロがイエスに言った。「先生。私たちがここにすることはすばらしいことです。幕屋を三つ造りましょう。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。」ペテロは、何を言ったらよいのか分からなかったのである。彼らは恐怖に打たれていた。そのとき、雲がわき起こって彼らをおおい、雲の中から声がした。「これはわたしの愛する子。彼の言うことを聞け。」彼らが急いであたりを見回すと、自分たちと一緒にいるのはイエスだけで、もはやだれも見えなかった。」

ペテロは、このことについて話しているのです。ペテロ自身が、地上の幕屋から去り、永遠の御国に入ることを確信していましたが、キリストご自身が肉体をもって生まれた時に、ちょうど幕屋の幕のように、神としての栄光の現れは隠されていました。けれども、主はここにあるように栄光と力が現れています。そして主は、世の終わりに世界に戻ってこられる時に、このお姿で現れるのです。黙示録 1 章には、ヨハネに対してご自身の栄光の姿で現れ、彼は倒れて死んでしまった人になりました。そして 19 章に、諸国の軍隊に対して戦う、王の王、主の主として現れます。

## 2B さらに確かな預言のことば 19-21

<sup>19</sup> また私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜が明けて、明けの明星があなたがたの心に昇るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。

高い山で、ここまで御姿を見て、御声を聞いたけれども、それよりも確かな、預言のことばがあると言っています。午前礼拝の説教をぜひ聞いてください。今の教会で、残念なことに預言に着いての学びが足りません。聖書の中で、預言は、神ご自身の確かさ、みことばの確かさを表すことばとして、主は数多く語られてきたのです。私たちの教会が、聖書全体を見つめ、数多くある預言にも心をしっかりと留めて行っているのは、このペテロの勧めがあるからです。

そして、キリストが、明けの明星と呼ばれています。主が暗き世において、光として現れてくださいました。そして、光として来られます。この方が来られる時に、「明けの明星があなたがたの心に昇る」と言っています。私たちにとって、世の中を見渡したら、すべてが暗く見えます。しかし、希望があるのです。この方がおられるし、またこの方が来られる希望があるのです。

この暗き世に、それらをともしびとして目に留めているとよいのです。ともしびは、自分の一歩前しか見せません。自分の近い周囲しか見えません。けれども、着実に前に進むことのできる光はく

れます。そのようにして、私たちは信仰によって一歩、一歩、前進するのです。すべてを主が見せてくださるわけではありません、けれども、前に進めば次の一歩は見せてくださるのです。

<sup>20</sup> ただし、聖書のどんな預言も勝手に解釈するものではないことを、まず心得ておきなさい。

預言が、確かな神の証しであるのですが、だからといって、預言と言われているもののすべてを、鵜呑みにしてはいけないことをペテロは、警告しています。2章で、偽預言者のことかたり始めます。偽預言者については、モーセの律法でも預言されており、預言者も、偽虚言者について数多くを預言しました。主ご自身も、山上の説教で、偽預言者に警戒するように言われていましたね。

その偽預言者の特徴が、自分の心に思っていることを語っているということです。「エレ 23:25-27 わたしの名によって偽りを預言する預言者たちが、『私は夢を見た。夢を見た』と言うのを、わたしは聞いた。いつまで、あの預言者たちの心に偽りの預言があるのか。心の偽りごとを語る預言者たちのうちに、彼らの先祖がバアルのゆえにわたしの名を忘れたように、彼らはそれぞれ自分たちの夢を述べ、わたしの民にわたしの名を忘れさせようと、企んでいるのか。」心に思い浮かんでいる事、単なる夢を主の名でかたっているのが、偽預言者です。主からのことば、啓示ではなく、自分の思いを語っています。

聖書を教えていると言っている者たちの中で、その主張していることが、どこから来ているのかを確かめる必要があります。結局、根拠にしているのが、聖書のことばではなく、他の人が言ったことや、聖書で確認できないことを語っているのであれば、それは偽りです。これは、カリスマ派と呼ばれる、預言を強調する人々間の話だけではありません。尤もらしく、今の世の教えにかなうような、なめらかな教えにも、結局は、聖書のことばではなく、何か他の哲学であったり、人間の教えであったりするのです。

<sup>21</sup> 預言は、決して人間の意志によってもたらされたものではなく、聖霊に動かされた人たちが神から受けて語ったものです。

預言が、あたかも人間の意志によって語られたものであるかのように語っている人がいたら、注意してください。人間的な要素は、もちろん聖書の書き手にもあります。その人の性格、書き方、当時の文書の特徴など、いろいろな背景はあります。けれども、それら人間的な要素を越えたところの、聖霊に動かされたというところが、聖書が神のことばにたらしめる、最も重要なところなのです。ですから、聖書を見る時、人間的な要素だけで見てはいけません。自分自身が聖霊によって、このことばを悟るのです。

ペテロは、この箇所以外にも、預言が聖霊に動かされた人によって書かれていることを話してい

ます。「使 1:16 兄弟たち。イエスを捕らえた者たちを手引きしたユダについては、聖霊がダビデの口を通して前もって語った聖書のことばが、成就しなければなりませんでした。」ダビデ自身も、自分が御霊によって語っていると、語っている箇所があります、「Ⅱサム 23:2 【主】の霊は私を通して語り、そのことばは私の舌の上にある。」

ですから、預言は神のことばであります。神の息が吹きかけられました。そして、それを悟るにも、先に言いましたように、御霊によってなのです。私たちが御霊を信じて、その導きに従い、この方に、すでに神の息が吹き込まれているみことばを知るのです。パウロが言った言葉で、終えたいと思います。「Ⅱテモ 3:16 聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。」

今回は、聖霊に拠る預言ではない、偽預言者、偽教師について、ペテロが警告していくところを、読んでいきます。